

## 「がる」再考

清水 由美

### 要 旨

形容詞（形容動詞を含む）を感情形容詞と属性形容詞に分けると、一般に動詞化の接尾語「がる」がつくかどうかはその指標とされる。しかし「強い」「新しい」などの、一般に属性を表現するとされる形容詞にも「強がる」「新しがる」の表現があるなど、反例も少なくない。これまでこのような例は例外として、あるいは「がる」の多義性に帰して扱われてきたが、例外の多い現象を客観的な分類の指標とすることには無理がある。本稿では「がる」が付加されるかどうかは、①形容詞の語用論的な意味と、②「がる」そのものがもつ、非言語行動による動作性が決定すると仮定し、その例証を試みた。また③「がる」が付加した文の自然さは、①と②の要素によって程度差を生じることを、印象の「そうだ」にうめこんだときに生ずる両義性を手がかりとして観察した。

〔キーワード〕 がる 主観的形容詞 経験者

### 1. 問題の所在

「うれしい」「悲しい」などの感情や「痛い」「かゆい」などの感覚を表す形容詞（および形容動詞）<sup>1)</sup>は、話し手の感情・感覚を表すのが原則とされ、構文上、あるいは共起制限の上で様々な興味深いふるまいを見せる。その一例は、言い切りの形で述語に用いられる場合、以下のような人称制限が観察されることである。<sup>2)</sup>

- (1)a. わたしはうれしい。
- b.\*あなたはうれしい。
- c.\*あの人はうれしい。

この人称制限とその解除という現象については、これまで多くの論考が発表されてきたが、それらの研究において感情形容詞を同定する際の指標とされて

きたのが、動詞化の接尾語「がる」の付加を許すかどうかということであった。「がる」のつくものを感情形容詞、つかないものを属性形容詞とする分類方法である。<sup>3)</sup>

しかし、この分類方法が適用できない例がいくつか見られる。それは「強がる」「新しがる」など、属性形容詞としか思えない「強い」「新しい」に、「がる」のつく形が認められることである。小山(1966:73)はこれを「本来のものではなく、『……のふりをする』の新造語である。」とし、西尾(1972:24)も「これらの『～がる』は形容詞が表わしているようすを自分が所有しているふりをする、そのことを誇示する、のような意味であって、『うれしがる』『痛がる』などの『～がる』とは区別して考えうるものである。」と述べ、ともに例外として処理している。西尾は同時に、感情と属性の中間的な位置にあるものに、「汚がる」「重宝がる」などの用例があることを認めているが、これについては、「属性形容詞ではあるが、やや感情形容詞的にも用いられることのあるもの」(:25)と、ややあいまいな記述になっている。

感情形容詞の構文論的なふるまいについては、「他者の感情を表すときには『がる』をつける」というように記述されることも多いのであるが、そもそも「がる」の付加による感情／属性の分類がこのように例外の多いものであるとしたら、こうした記述は単なる同語反復にすぎず、客観的な指標としての使用には耐えないことになるであろう。もちろん中には語彙的意味によって決まるような、説明を許さない現象もあることは予想されるが<sup>4)</sup>、これら一連の現象を「規則」と「例外」というように処理するのではなく、一貫した指標のもとに連続的に理解できるような説明がほしいところである。

本稿ではこれまでの研究で例外として扱われてきた上のような現象について、形容詞の語用論的な意味を見直し、さらに主観性を帯びた形容詞を「そうだ」文にうめこんだときの両義的な読みの発生をヒントに、「がる」付加の自然さについて観察する。同時に「がる」の機能そのものについても再考を加えることによって、「がる」付加の条件について、総合的な説明を試みる。

## 2. 「がる」付加の条件

### 2.1 経験者の存在

「うれしい」「痛い」などの典型的な感情・感覚形容詞の他に、「汚い」「重宝だ」など、内的な感情・感覚とはいえないまでも、何らかの主観的な意味あ

いを帯びた形容詞があることは、上で見たとおりである。ここではこれらを一括して「主観的形容詞」と呼び、検討をくわえることにする。

このような「がる」のつく形容詞を、Ohye(1973)は格構造と述語構造の面から、次の5つに分類している。<sup>5)</sup>

- |        |        |       |       |                 |
|--------|--------|-------|-------|-----------------|
| (2) A. | 経験者ガ   | φ     | _____ | 例：寂しい、眠たい、寒い、暑い |
| B.     | 経験者ガ   | (対象ガ) | _____ | 例：悲しい、くやしい、残念だ  |
| C.     | (経験者ガ) | (対象ガ) | _____ | 例：つらい、まぶしい、苦しい  |
| D.     | (経験者ガ) | 対象ガ   | _____ | 例：面白い、難しい、気の毒だ  |
| E.     | φ      | 対象ガ   | _____ | 例：冷たい、熱い、汚い、重宝だ |

ここで「経験者」と言うのは、当該の感情・感覚・判断を抱く主体のことであり、当然有情物（典型的には人）がくる。<sup>6)</sup>そして「対象」というのは、そのような感情・感覚・判断を引き起こす、あるいは感情・感覚・判断が向かうモノやコトをさす。<sup>7)</sup>かっこに入っているのは、その項が落ちる場合のあることを示している。したがって、たとえばC類の形容詞で言えば、経験者のみをとる場合（例：私はまぶしい）、経験者と対象をとる場合（例：私はそのあかりがまぶしい）、そして対象のみをとる場合（例：そのあかりはまぶしい）の3通りがあるということである。

ここで注意すべきは、経験者の項の有無である。AとBの類では経験者の存在が必須である。<sup>8)</sup>それに対し、CとDは経験者を欠くことがあり、Eにいたっては経験者の項を全く取らない。主観性の有無で判断するなら、Eはもちろん、CやDも、そもそも主観を抱く主体が存在しない（ことがある）以上、感情形容詞に分類することはできないように思われよう。しかし、接尾語「がる」を取るという点から言えば、上に挙げた形容詞はすべて、いわゆる感情形容詞に分類されてよいものなのである。

AとBについては、これら主観性をおびた形容詞の中でも最も主観性の強い「内的感情」を表すもの、すなわち「感情形容詞」の典型として認めてよいであろう。「がる」付加の可否についても、この類には問題となるような語はない。それに対し、C以下には、「つらがる」「重宝がる」など、充分言えることは言えるのだが、AやBの形容詞の場合とくらべると、「がる」の付加がやや耳慣れない感じのものがある。このC以下の形容詞は感情というより、「主

観的判断」<sup>9)</sup>というべきものである。

この「主観的判断」のうち、もともと経験者の項が存在しないE類においては、「がる」を付加するときには、新たに経験者の項が増えることになる。

- (3)a. この鍋はなかなか重宝だ。  
b. 母はこの鍋を重宝がって使っている。

(3b)の「母」は、新たに加えられた経験者<sup>10)</sup>である。これを(3a)においても明示するとすれば、「母にとって」というように注釈的に言うしかない。しかし、注釈的に経験者を明示できるという点では、一般に属性形容詞とされている「新しい」のようなものでも、次の(4a)のように言うことが可能であり、事実、その場合「がる」形を派生させることができる。

- (4)a. 私に言わせれば、私の考え方こそ新しいのだ。  
b. 「議論する気はない。目先の成績だけで、右往左往すれば、しっかりしたお得意をなくしてしまうんだ」「時代がちがうんじゃないかと思えます」「新しがっているのか」(山田太一『岸辺のアルバム』)

つまり、属性形容詞というべき、本来経験者不在の客観的な形容詞であっても、そこにそのような属性があると認める判断の経験者をもちこむことによって、「がる」の付加が容認されるということになる。

しかし、このような語用論的な意味をもちこむとなると、感情形容詞と属性形容詞というカテゴリーを立てること自体が無意味になってしまいそうである。しかしながら、なお上のA～Eの各類から属性形容詞にいたる各形容詞の間には、「がる」付加の自然さに関して、ある程度差が感じられるのも事実である。その程度差に対する説明を次に試みる。

## 2. 2 「そうだ」による二重の主観性

ムードの助動詞「そうだ」は、話し手<sup>11)</sup>の判断・印象を示すもので、すなわち「……そうだ」の「……」の部分の命題に対する話し手の主観を表現する手段である。先に(2)でAに分類した典型的な感情形容詞「うれしい」なども、「そうだ」をつけることによって、話し手以外の主観を間接的に表現すること

が可能となる。

(5)a.\*あなた／あの人はうれしい。(=(1b)(1c))

b. あなた／あの人はうれしそうだ。

このとき、「そうだ」で表される「印象」という主観の経験者と、「うれしい」で表される「内的感情」という主観の経験者は同一人物ではない。さらに、下の(6)の「顔」の持ち主は、「うれしそう」「かなしそう」という印象を受けた(経験している)人物のものではなく、「うれしい」「かなしい」という感情を経験している人物のものである。

(6)a. うれしそうな顔

b. かなしそうな顔

このことを踏まえたうえで、次の表現を見てみよう。

(7)a. まぶしそうな顔

b. 難しそうな顔

c. 冷たそうな顔

(6)に使用した形容詞「うれしい」「かなしい」は(2)の分類でA、Bにあった「内的感情」を表すもので、(7)に使用した形容詞「まぶしい」「難しい」「冷たい」はCからEの「主観的判断」を表すものである。(7a)の「顔」はやはり、(6)同様「まぶしい」という主観の経験者のものであるが、(7b)(7c)になると、「難しい」「冷たい」という主観の経験者の顔ばかりでなく、逆に、見る人にそのような印象を抱かせる顔という読みもできる。この二つの読みの違いは、およそつぎのような文例で示すことができる。

(8)a. 難しそうな顔をしているけど、そんなにこの問題、難しい？

b. 難しそうな顔をしているけど、あの部長、けっこう話せるらしいよ。

(9)a. 冷たそうな顔をしているけど、これでも温水プールなんだよ。

b. 冷たそうな顔をしているけど、あれでも彼、やさしいところあるんだっ

て。

(8)(9)において、a.の「顔」は「難しい」「冷たい」という主観の経験者のものであるが、b.の「顔」は「難しそう」「冷たそう」という印象を与える人物のものである。言葉を変えて言えば、b.においては「そうだ」という印象の経験者の主観が勝っているのである。<sup>12)</sup> (2)の分類のA、Bにあたる(6)の「うれしそうな顔」「かなしそうな顔」、およびCにあたる(7a)の「まぶしそうな顔」には、そのような読みは考えられない。おおよそCのあたりを境に、D、Eの類になるにつれ、「……そうな顔」において、このような両義性を生じやすくなるようである。「おもしろい、こわい、つまらない、うるさい、うまい」などがその例である。

そして(8)(9)のa.b.それぞれの読みにおいて「がる」付加の可否をテストしてみると、b.の読みに忠実な意味では、「がる」をつけることができないことがわかる。

- (10)a. 難しがっているけど、そんなにこの問題、難しい？  
b.?? 難しがっているけど、あの部長、けっこう話せるらしいよ。  
(11)a. 冷たがっているけど、これでも温水プールなんだよ。  
b.?? 冷たがっているけど、あれでも彼、やさしいところあるんだって。

そして「新しい」のような属性形容詞になると、「新しそう」の意味するものは、もはや印象の経験者の主観でしかなくなる。したがって「……そう」の「……」に当たる主観（すなわち「新しい」とする判断）の経験者の顔を修飾するような意味での「新しそうな顔」という表現自体も成り立たず、「新しそうなスーツ」「新しそうな本」のように、「対象」を修飾することしかできなくなる。<sup>13)</sup>

2. 1で見たように、単に「がる」付加の可否だけでみると、コンテクストさえ与えれば属性形容詞でも「がる」付加は可能であり、主観的形容詞との分類の意味が失われてしまうように思えるのであるが、新たに「印象」という主観の意味をかぶせることになる「……そうな（顔）」をつけて、「……という主観を抱いている（顔）」という読みができるかどうかをテストしてみると、属性形容詞と呼ばれるものは、そのような読みを許さないものであることがわ

かった。

(2)の分類のC以下のような、経験者を欠く(ことのある)主観的形容詞は、このテストにおいて、「……という主観を抱いている(顔)」と「……という属性を持っているように見える(顔)」という二つの読みを許す点で、「がる」附加の自然さの程度において中間的な位置にあると言えよう。Eに分類される「うまい」(美味である)について、この両義性を示す実例を掲げておく。

- (12)a. 女房は……そいつにマーマレードのようなものをなすりつけてうまそうにはおぼった。(椎名誠『いまこの人が好きだ!』)
- b. しかしそれにしても本当にうまそー!なのである。見ただけでともかくうまそうなのである。(椎名誠『いまこの人が好きだ!』)

### 2.3 「がる」の意味

1. で述べたように、「がる」がつくかどうかを感情/属性形容詞の分類の指標とする研究の多くは、「がる」が「新しい」「強い」などの属性形容詞にもつくことがあるのを「がる」の多義性に帰し、例外として処理してきた。しかし、2. 1で観察したように、語用論的なコンテキストさえ与えられれば——すなわち経験者が存在すれば——、多少耳慣れない感じを与えることはあっても、とにかくたいの形容詞に「がる」はつきうるのである。「高い」のような尺度形容詞に「がる」をつけた用法を認める話者もある。実際、(13)はさほど破格とは感じられない。

- (13) このくらいの値段を高がってはいはここで買物はできないよ。<sup>14)</sup>

「がる」の語源にはいくつかの可能性があるようだが、<sup>15)</sup> 現代語の話者として、「うれしがる — まぶしがる — 難しがる — 重宝がる — 新しがる」といった一連の「がる」の意味に、明確な多義性を認めることはできない。少なくとも共時的には何らかの有契性があるものとみて、本稿では「がる」の意味を次のように定義したい。

- (14) 経験者の感情・感覚・判断を引き起こさせる事態のあり方を、経験者が観察者に、そのような感情・感覚・判断の存在を認めうるような言語的

・非言語的行動によって示す。

感情・感覚のほかに判断を加えたのは、属性形容詞に「がる」がつく場合のことを考慮したためである。属性形容詞であっても、コンテキストによっては、主観的に使われる。*mansion* の住人が2DKのうさぎ小屋を見て「狭いなあ。よくこんなところに住んでられるね」と叫んだり、箸より重いものを持ったことのない人物が、ツルハシを持たされて「おもたーい。こんなもの持ったら腕が折れちゃう」と発言する場合、「狭い」「重たい」は主観的判断を表している。このような場合、稿者の語感では(13)の例と同様、(15)のような表現を許容できるものである。<sup>16)</sup>

(15) そんなに狭がらないでよ、これでも東京では広い方なんだから。  
なに気取ってんだよ。そんなに重たがるほどのもんじゃないだろ。

さらに、(14)の定義において「(観察者が)そのような感情・感覚・判断の存在を認めうるような」と注したのは、大江(1975)の次のような指摘を念頭に置いてのことである。

(16) 「暑がる」「寒がる」はいえるのに「暖かがる」が存在しないのはなぜか。(問題を)「むずかしがる」といえて「やさしがる」といえず、「きたながる」といえて「きれいがる」といえないのはなぜか。<sup>17)</sup>

これは、大江(1975)のいうように、「暖かい」「易しい」「きれいだ」という感覚や判断を外面化するような行為が、一般的に考えにくいためである。「暑い」場合であれば、着ているものを脱いだり、パタパタとあおいでみたり、窓を開けたり、しきりに汗をふいたりするであろう。それに対して「暖かい」とときには、当該の形容詞をしきりに発語するという言語的行動以外には、気持ちよさそうにぼんやりしているくらいのもので、経験者が「暖かい」と感じているかどうかを、観察者が判定しうるような典型的な非言語的行動は想定しにくい。

「がる」の使用のためには、言語的行動よりも非言語的行動の方が要請度が高いとみてよい。(15)の「狭がる」にしても、「狭い、狭い。」と口にするだ



けでなく、鴨居に頭をぶついたり、家具に足をぶつけて文句を言ったりという行動が観察された方が、自然に言えるようである。

また、動作に重点の移った「可愛がる」「こわがる」<sup>10)</sup>などの存在も、「がる」の動作性を支持する証左と思われる。さらに、「悲しい—悲しむ」のように、対応する動詞を持つ場合、「がる」のついた形は動作を表すという効果をより端的に示すようである。「悲しがる」と言った場合、「悲しい」感情の实在は保証されなくてもよいほどである。「哀れがる」と「哀れむ」、「苦しがる」と「苦しむ」に見られるような意味の違いも、同様の例である。次のような擬人法の成立を支えているのも、やはり「がる」の動作性である。

- (17) 寒さを迎えると、鈴木さん（高名な薔薇の育種家）は電話であれこれと教えてくれた。「寒さに弱いから」とはいわず、「薔薇が寒がりますからね」という表現をした。さすがだな、と思った。（辰濃和男「風遊風学」）

つまり薔薇を愛する人にとっては、薔薇がそれと認めうる形で寒さを経験していることを顕示していると観察できるために「がる」が使えるのである。薔薇に興味のない人が見れば、それは単に葉を落したり、新芽が出なかったりするだけのことかもしれないが、それを動作として観察しうる愛好者の感覚がこの擬人法を支えているのである。

### 3. まとめ

本稿では「がる」が接続するかどうかは、当該の形容詞が意味する主観内容を経験する（すなわち感情・感覚・判断として抱く）者が存在するかどうかという形容詞の語用論的な意味と、「がる」のもつ「非言語行動による動作性」を保証するだけの語彙的な意味をその形容詞がもつかどうか、の2点によって決まることを見た。そしてその「がる」形の自然さは、「そうだ」の付加によって両義性を生じる「冷たい」「うまい」などの類を境として転換点が見られるものの、あくまでも程度問題であることを観察した。

いずれにしても、「がる」の付加によって形容詞はその意味を変化させるわけなので、たとえば「たい」と「たがる」を人称を条件とした異形態であるかのように見なす分析はできないであろう。「がる」文の人称制限といわれるものについての説明にも、経験者および観察者という概念は有効であると思うが、

その考察は別稿にゆずる。

—— 注 ——

- 1) 以下特にことわらないが、本稿で「形容詞」というときは「形容動詞」を含むものとする。ちなみにいわゆる形容動詞の中には名詞と区別しがたいものもあるが、本稿の範囲ではとくに品詞分類が論旨に関わってくることはない。
- 2) これに関する指摘は三上(1960:191f.)が早く、小山(1966:73)以降、構文論として取り上げられることになるようである。
- 3) 小山(1966)をはじめ、西尾(1972:23)など。また、この方法による分類に基づいて構文論を展開している論文も多い(沢田(1973)、加藤(1976)など)。
- 4) 「好き」「嫌い」「心配」など、いかにも主観的と見られる形容詞(とくに形容動詞)に「がる」がつかないことなど。
- 5) Ohye(1973:145)。本稿では原文の‘Experiencer’を「経験者」、‘Object’を「対象」と訳した。なお、Ohye(1973)のこの項の記述は、大江(1975)第7章ともかなり重なっている。
- 6) 諸研究で感情主とか感じ手、情意主体などと言われているものに当たるが、後述の「がる」についての考察において、いわゆる属性形容詞に関してもその属性をそれと判断する主体について論じる必要があるため、感情という語に限定しなくてすむ「経験者」という語を使用した。
- 7) これを原因と対象に分けている文献もあるが(仁田(1979)など)、その差は経験者の能動性の程度の問題であると思う。「驚く」や「愛する」などの動詞表現をも含めて考察する場合には有意味な分類であろうが、本稿の限りではその必要はないものとして、一括して扱う。
- 8) 具体的な言語形式において必ず明示されなければならないということではない。「う、寒い。」「くやしいなあ。」など、経験者(=話し手)を明示しない形の方がむしろ自然である。
- 9) 大江(1975:208)。Ohye(1973)では‘Subjective judgements’。なお「内的感情」は‘Internal feelings’。
- 10) 2. 3で述べることから言えば、むしろこれは動作者というべき存在である。
- 11) 「そうだ」で表される主観の持ち主は、やはり本稿でいう「経験者」である。つまり「そうだ」文においてはその話し手が、「印象」という主観を抱く経験者ということになる。
- 12) これが「印象」ではなく「断定」になれば、当然「難しい顔」「冷たい顔」という言い方になり、属性形容詞として読めるようになる。なお、「冷たい水」と「冷たい顔」は共感覚による多義といってよいものであるが、ここでの論旨はあくまでも主観の二重性にある。

- 13) 「新しそうな顔」という表現をあえて解釈するとすれば、「整形手術をしたばかりのような顔」のような事態しか考えられない。
- 14) 大江(1975:209)の例文。
- 15) 『日本国語大辞典』によると、「アハレガル、ウレシガル、痛ガル、面白ガルのガルは情をそそられる意から、アガルの約。道心ガル、才子ガル、得意ガルのガルは、ゲ(気)アルの約〔大言海〕」などの紹介がある。
- 16) 「重い — 重たい」「古い — 古臭い」のように対応する語がある場合、「がる」の付加が自然なのは、やはり主観的響きの強い後者の方である。また「新しがる」「強がる」などの場合は、外界の対象の属性ではなく、経験者自身の属性を対象とし、それについての判断を言っていることになる。
- 17) 大江(1975:210)。
- 18) これらは高度に語彙化されて、派生語という意識が持たれなくなっており、一人称主語とともに用いられることも可能である(大江(1975:211))。

——— 主要参考文献 ———

- Ohye, Saburo(1973) 'Notes on Japanese Verbs in -garu', *Descriptive and Applied Linguistics*, 6, International Christian University.
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究 — 主観性をめぐって』南雲堂。
- 加藤主税(1976)「「たい、たがる、ほしい、ほしがる」について」『日本語・日本文化』5、大阪外国語大学研究留学生別科。
- 小山敦子(1966)「「の」「が」「は」の使い分けについて」『國語學』66。
- 沢田治美(1973)「「たい/たがる (=want to~)」構文の文法」『英語教育』22-6, 7。
- 西尾寅弥(1972, 91<sup>7</sup>)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版。
- 仁田義雄(1979)「感情表現への一考察」『国文神戸』3号、神戸大学文学部。
- 三上章(1960, 90<sup>19</sup>)『象は鼻が長い』くろしお出版。

(お茶大日本言語文化専攻修士2年)

付記) 本稿脱稿後、当誌第3号に中里理子氏の論文「従属節における『たい』と『たがる』」のあることを知った。観察者の存在や、「がる」の分布が人称を条件とするものでないことなど、共通する部分もあるようだが、本稿は「がる」付加の対象を感情形容詞に限っていない点などで、論点を異にしている。詳しくは、稿を改めて検討させていただきたい。